



オシリス・シヤフト

坂口 賢朔

押し潰されそうな程の静寂のなかで、彼女は目覚めた。

ピッキーン

ひとつぶの水滴が張りつめた世界を破壊する。

ゆっくりと瞼を開けた彼女は、クフの威厳に満ちた顔を見下ろしていた。何事にも屈しない強い意志を具現化したような瞳が、虚空を見つめている。四人の女神の気配、インス、ネフティス、ネイト、そしてセルケト。女神たちの温かい眼差し。その他無数の目、四方の壁に記されたピラミッド・テキスト、それらのヒエログリフの小さな目が、静かに古代の王に注がれていた。

彼女はその結界から抜け出すと、ゆるい下り坂の通路を降りていった。突然視界が開ける。その巨大な広間は、無数の彫像で埋め尽くされていた。槍と盾をもった物言わぬ軍隊が整然と並んでいる。それを率いるのはホルスとメンチュ、その2神を従えているのはオシリスとなったクフであった。

何かに引っ張られるように、彼女の意識は次の間へと向かっていった。

『黄金のハレム』

数脚の椅子、大小様々な箱、そしてベッド、ゴブレットなどの無数の食器類。更にはゲーム盤までが揃っていた。それらが、実際に生活しているかのように実用的に配置されている。しかもそれらのものすべてが黄金色に輝いていた。

その眩さに圧倒されながらも、更に奥へと進んでいく。

そこは小さな正方形の間だった。そのほぼ中央のくぼみに石棺がひっそりと鎮座していた。

ピッキーン

ふたたび静寂を突き破る水音。

この間は、半ばまで水に沈んでいた。石棺に向かって引っ張られていく意識を、何かが引き止めていた。

恐怖だ。水に対する恐怖。

彼女は、自分の両腕を見た。そして身体。

実態のないバー。

何かが欠けている。彼女はゆっくりと辺りを見回した。ここが終わりの間ではなかった。反対側の壁の上部の隅に小さな黒い口が開いている。通ろうとする者を拒む程小さな入り口。彼女はそこに向かい、中に入っていった。

彼女の求めているものがその先に存在しているのを、彼女は感じ取っていた。ひどく懐かしく思われる何か。それが次の間にある。気持ちだけが急いでいるものの、その進みはあまりにも遅かった。彼女は疲れていた。まるで彼女を拒んでいる何かに邪魔されているかのように、先へ進めば進む程その疲れは増幅していった。通路の出口が、すぐそこに見えていた。

すべてが千切れていってしまいそうな苦痛にさらされながらも、彼女はそこへ向かっていった。

意識が朦朧としはじめ、何もかもが無に帰ろうとしていた。それでも気力を振り絞って昇りつめていった。彼女のなにもかもが砂のごとく吹き飛ばされそうになる寸前だった。砕け散りそうになる意識、それを絶望が押しとどめた。

通路の出口かと思っていたが、そこは狭い登り坂の終わり、その向こうは同じような傾斜で下りとなる曲がり角のようなものでしかなかった。しかもその折り返し地点には、避けようのない落とし穴が掘られていた。彼女はその落とし穴の先に感覚を延ばしていったが、まるで底のない流砂のように感じられた。

延ばした感覚を突然何かに捕まえられ、急激に引っ張られてしまった。

「あっ」

声にならない声を張り上げながら、彼女は奈落(レテアシユ)の底に落ちていった。永遠に続くのかと思える程の長い下落感の後、すべてが無になった。今まで感じていた彼女自身の重さも重力もなにも感じない世界。どこかの神殿を想わせる広間に、彼女は漂っていた。その広間の中央には、玉座に腰をすえたファラオ・クフの巨大な石像が鎮座していた。

しかし彼女が視線を止めたのは、その横に立つ女神の像だった。ほぼ等身大かと思われるその女神は、彼女の知っているエジプトの女神のどれにも一致しなかった。その頭にのせている冠も神を象徴するものでもなければ、エジプトのものでもなかった。

シャープさを感じさせる頬骨から顎のライン、エキゾチックな細い唇、ほっそりと高い鼻、そしてエジプトらしからぬアイコン。彼女はそれらに懐かしさを感じ取っていた。

「あぁ」

喉から手がでてきそうな感覚に、ため息をもらしてしまった。

その女神の像がぼんやりと輝き始めたかと思うと、すべての光を吸収したかのように眩く輝き始めた。その輝きは、今まで味わった事のないような恍惚感を彼女にもたらした。その感覚に酔いしれる間もないまま、輝きは女神像の中に収縮していった。

ふと気付くと、彼女はその女神像の中にいた。

そして、背中から羽が生えたのかと思う程のエネルギーのうねりを感じていた。

辺りはもはや、薄暗い闇の中ではなかった。

バーだけの存在であった彼女は、ついに己のカーの存在を見つけ出し、お互いに結ばれ、そして、アクに生まれ変わったのだ。彼女は今や凄まじいエネルギーの塊となり、その出口を探して爆発してしまいそうなほどになっていた。彼女は、自分が落ちて来た穴を見上げ、タイミングを計るかのように静かに呼吸を繰り返した。

そして、跳んだ。

すぐに天井にぶつかり、先程とは逆の方に進む。そこはゆったりとしたカーブを描きながら下る坂道だった。そのまま、そこに留まるような気持ちで下り坂を滑っていく。フワリとした無重力感とともに、水の中に沈む石棺が視界の中に入ってきた。

アクとなった彼女には、もはや水は恐怖の対象とはなりえなかった。

水に飛び込んだ時の感じは、想像していたものよりはるかに軽いものでしかなかった。そのまま石棺の中にも突き進んでいく。石のなかを抜けていく感じは、なんとも表現し辛い嫌な感じだったが、石に弾き返される訳でもなく、そのまま底まで突き抜けてしまった。

水に浸食された狭い通路の先に、何者かが待ち受けていた。

冥界の王であるオシリス。

その神に行く手を遮られるのかと彼女は思ったが、オシリスは黙ったまま場所を開け、そして指差した。

オシリス・シャフトからピラミッドにのびる『復活への道』だった。更にエネルギーを増した彼女は信じられない速度でその道を進んでいく。その道は中程まではまっすぐで平坦であったが、その後はわずかな上り坂となりつつ、ピラミッド内の上昇通路に向かっていった。

彼女はその上昇通路内に入ったものの、その狭さに今にも爆発しそうになっていた。まるで自分が太陽神ラーそのものになってしまったのではないだろうかと思われるほどのエネルギーに包まれ、限界に達しようとしていた。この狭い通路に阻まれて、思いっきり羽を伸ばす事もできぬまま、その秘めた塊を爆発させられる場所を切望していた。

そして、突然それは訪れた。

通路が広くなり、天井は見上げるばかりに高くなっていった。

彼女は、その天井に向かって垂直に昇っていった。しかし、天井付近で重力に捕まってしまった。

そのまま落下していく。通路の底にぶつかる寸前、彼女は身をひるがえし、また垂直に昇っていく。彼女の内のエネルギーは、更にエネルギーを吸収しつづけていた。それがいったい何回続いたことだろう。